

日本ヴィクトリア朝文化研究学会 第 17 回 全国大会プログラム

日 時： 2017 年 11 月 18 日（土） 10:00～18:00
場 所： 関西学院大学西宮上ヶ原キャンパス G 号館 3 階
〒662-8501 兵庫県西宮市上ヶ原一番町 1-155

★研究発表（10:00～12:25）

※ 第一発表（10:00～10:45） 第二発表（10:50～11:35） 第三発表（11:40～12:25）

第一室（307 室）	第二室（308 室）
司会：大分県立芸術文化短期大学 萩 野 哉 1. 眠りのイメージの象徴性 —J. W. ウォーターハウス《聖カエキリア》 をめぐって 筑波大学（院）若 名 咲 香 2. アイリッシュ・アーツ・アンド・クラフツ 運動におけるステンドグラス芸術 —An Túr Gloine と Harry Clarke を中心に 青山学院大学（兼）高 橋 優 季 司会：大阪市立大学 田 中 孝 信 3. 象徴としてのラスキン —労働者教育とアイデンティティの形成 慶応義塾大学 横 山 千 晶	司会：立命館大学 金 山 亮 太 1. 拒絶する／される人造美女 —W. S. Gilbert, <i>Pygmalion and Galatea</i> (1871) に関する一考察 日本女子大学（兼）林 美 里 2. 後期ヴィクトリア朝の児童向け雑誌にみら れる Alfred Tennyson 受容 —<i>Girl's Own Paper</i> と <i>Boy's Own Paper</i> を 中心に 津田塾大学（院）鈴 木 千 枝 3. 19 世紀英国と 20 世紀日本における『大君 の都』の影響の一考 筑波大学（院）濱 島 広 大

★シンポジウム（301 室、13:45～16:30）

南方熊楠から見たヴィクトリア朝—科学と神秘主義と文学

司会：東京大学 大 石 和 欣
パネリスト：成城大学（兼） 田 村 義 也
京都外国語大学（兼） 志 村 真 幸
明治大学 小 澤 央
コメンテータ：京都大学（誉） 川 島 昭 夫

★ラウンドテーブル（307 室、13:45～16:30）

ヴィクトリア朝後期の少女雑誌—*Girl's Own Paper* をめぐって

司会・提題者：日本女子大学 川 端 有 子
早稲田大学 牟 田 有 紀 子

★特別講演（301 室、16:40～17:40）

ヴィクトリア朝のウォーキング—登山、散策、文学

司会：西南学院大学 金 子 幸 男
甲南大学 中 島 俊 郎

★総会（301 室、17:45～18:00）

司会：日本女子大学 佐 藤 和 哉

★懇親会（18:00～20:00）

会場：関西学院会館「翼の間」

【研究発表】

(第一室)

眠りのイメージの象徴性—J. W. ウォーターハウス《聖カエキリア》をめぐって

筑波大学(院) 若名 咲香

ヴィクトリア朝では、絵画・写真・文学・医学雑誌等で、眠る女性が頻繁にとりあげられ、一つの文化的流行を形成していた。B. ダイクストラ等の従来の研究は、絵画に描かれた「眠る女」を観者の窃視の対象として論じ、その受動性を強調してきた。しかし近年の研究は、「眠る女」が孕む能動性にも注目し、ヴィクトリア朝文化における眠りの重層的な意味を探っている。本発表ではこの動向を受け、J. W. ウォーターハウスの油彩画《聖カエキリア》(*St. Cecilia*, 1895) に描かれた聖女の眠りを考察する。目を閉じた聖女は、視覚を遮断しながらも、視覚的には認識困難な聖性を天使の姿として幻視する。聖女は眠りによって、世俗の世界から離れて理性的な視覚を放棄し、超自然的な感覚を研ぎ澄ませ、聖なるヴィジョンを捉える。この作品の眠る聖女は、受動的に観られるだけでなく、能動的に眼差す存在ともなるのだ。以上の考察を、図像的分析や同時代作品との比較等を通じて論じたい。

アイリッシュ・アーツ・アンド・クラフツ運動におけるステンドグラス芸術 —An Túr Gloine と Harry Clarke を中心に

青山学院大学(兼) 高橋 優季

本発表では、19世紀後半以降のアイルランドにおける文化復興運動、つまり「ケルト復興」を背景として広まったアイリッシュ・アーツ・アンド・クラフツ運動の具体的事例を掘り起こし、ケルト民族固有の国民的文化価値に視覚的な審美性が備わった過程を検証したい。当時英国より、ウィリアム・モリスの思想に基づいたアーツ・アンド・クラフツ運動を通じて諸分野に渡る工芸美術がアイルランドに伝播したとき、それらは芸術産業として国内の経済的自立を促進した。そのうち特にステンドグラスは、ヴィクトリア朝後期の、ラファエル前派の系統を引く多くの工房・職人から積極的に技術を取り入れ、アイルランドに特有の装飾美と民衆生活とを調和させた顕著な一例であった。したがって、アイリッシュ・ステンドグラス産業の発展を牽引したとの評価が定着している工房 An Túr Gloine (英語で“The Tower of Glass”の意味)と、同時期に活躍した職人 Harry Clarke の功績に焦点をあてることで、ステンドグラスから透かし見ることのできるケルトの独自性を提示してみたい。

象徴としてのラスキン—労働者教育とアイデンティティの形成

慶応義塾大学 横山 千晶

19世紀半ば以降、労働者教育の中でのラスキン像は大きく3つに分かれる。一つは労働者大学で素描を教え、のちの労働者教育や芸術教育に影響を与えた実践教育者としてのラスキン。二つ目は1860年以降『この最後のものにも』や『フォルス・クラヴィゲラ』を中心に執筆を通して労働者に語りかけた社会思想家としてのラスキン。そして晩年、あるいは彼の死後、労働者のアイデンティティの中で新たに「はぐくまれた」反体制的シンボルとしてのラスキンである。これらの3人のラスキンは、互いに関係しあい、またときに反駁しあいながら労働者の思想形成に寄与していった。本発表ではこの3つのラスキン像を、労働者大学、大学拡張運動、トインビー・ホール、そしてラスキン・コレッジといった労働者教育機関の活動の中に跡付けることで、19世紀半ばから20世紀初頭にかけて、ラスキンの言説がどのように解釈され、再評価されていったのかを探ってみたい。

(第二室)

拒絶する／される人造美女—W. S. Gilbert, *Pygmalion and Galatea* (1871) に関する一考察

日本女子大学 (兼) 林 美 里

W. S. Gilbert (1836-1911) の *Pygmalion and Galatea* (1871) は、George Bernard Shaw の *Pygmalion* (1912) 執筆にインスピレーションを与えたとされるバーレスク風の三幕の喜劇である。ブランク・ヴァースで書かれたこの劇に登場する人造美女としてのガラテアは、従来のピグマリオン伝説の類型と異なり、作り主に拒まれたあげく、最終的に人間世界を拒んで石に戻る。その点でこの人造人間は自らの意志で自分の運命を選択したといえる。21 世紀のいま読み直すと、この劇は近年研究・開発が進められている人工知能の行く末にも示唆を与えているように思われる。古典起源のピグマリオン伝説を素材としてヴィクトリア朝期に人造人間はどのように想像され、アイデンティを付与されたか。またその後の同種の (SF 作品を含む) 作品群にいかなる影響を与えたか。そうした問いを念頭に置きつつ、本発表では *Pygmalion and Galatea* における「拒絶する／される人造美女」の造形について考察してみたい。

後期ヴィクトリア朝の児童向け雑誌にみられる Alfred Tennyson 受容 —*Girl's Own Paper* と *Boy's Own Paper* を中心に

津田塾大学 (院) 鈴木 千 枝

1850 年 11 月に William Wordsworth の後をうけて桂冠詩人となった Alfred Tennyson (1809-92) はそれ以降名実ともにヴィクトリア朝を体現する詩人として一般に扱われた。一方で、Tennyson が活躍した中後期ヴィクトリア社会では、印刷技術の発達による出版コスト低下を背景に読書文化が一般に拡大し、併せて児童文学は黄金期を迎えた。1870 年代から世紀末にかけて出版された代表的な児童向け雑誌、特に少年誌 *Boy's Own Paper* とその姉妹誌で最も商業的に成功した少女誌である *Girl's Own Paper* のなかで、Tennyson の作品はどのようにこどもたちに紹介され、いかに彼の詩人像がこどもたちの間で構築されたのだろうか。本発表では、「信仰」や「愛国心」という文脈あるいは「女性の擁護者」としての詩人像を通して、Tennyson の表象が児童向け雑誌のなかでパターナリスティックに創造される過程を考察する。そこから、ヴィクトリア朝におけるこどもたちの「啓蒙者」としての Tennyson 像の形成と受容の性質を明らかにしたい。

19 世紀英国と 20 世紀日本における『大君の都』の影響の一考

筑波大学 (院) 濱 島 広 大

初代駐日英国総領事兼公使ラザフォード・オールコック (1809-1897) は第 2 回ロンドン万国博覧会 (1862) の日本部門を監修するとともに、『大君の都』(1863) や『日本の美術と工藝』(1878) などの著作を著わし、19 世紀後半の「日本趣味」隆盛に大きく貢献した。殊に主著『大君の都』の影響力は大きく、英国だけでなく日本にも影響を与えた。日本において影響を受けた人物に芥川龍之介 (1892-1927) がいる。彼は『大君の都』を参照し『侏儒の言葉』と「日本の女」を著わし、両作品でオールコックの日本観を肯定的に評価するが、肯定的な評価をする理由、さらには芥川への影響と 19 世紀英国への影響との差異が明白にされていない。本発表では芥川の作品と、彼が所有していた『大君の都』の読書の痕跡 (線や印の記入) を比較・考察し、芥川が『大君の都』の日本観を肯定した理由を明白にする。さらに『大君の都』の 19 世紀英国と 20 世紀日本における影響の差異の一端に言及する。

【シンポジウム】

南方熊楠から見たヴィクトリア朝—科学と神秘主義と文学

南方熊楠のロンドン 1892-1900

イギリスとアジアを結ぶネットワーク

熊楠・科学・神秘主義—イギリス文学を通して考える

司会：東京大学 大石 和 欣

成城大学（兼）田村 義也

京都外国語大学（兼）志村 真幸

明治大学 小澤 央

コメンテータ：京都大学（誉）川島 昭夫

1900年、夏目金之助の到着と相前後するように、南方熊楠はそれまで8年間滞在していたロンドンを去った。そのころまでにイギリスでは科学を軸にしたあらたな知の領域が編成されていた。職業的科学家集団が出現し、とくに植物学の分野では従来の博物学の流れをくむアマチュアと、博物館・大学の研究者が協力する体制が構築されていく。これは『ネイチャー』といった科学雑誌によっても支えられ、科学ネットワークがグローバルにはり廻らされていく。南方熊楠もそのなかの一人である。それと並行して神秘主義も隆盛し、世紀後半の文学や文化において確固たる基盤を築く。神秘主義は科学と同列であって、熊楠を含めた科学家やアーサー・コナン・ドイルのような医者兼作家も関心を寄せていた。

今回のシンポジウムでは、こうした19世紀末の状況を、熊楠を軸にして断面図として切り取るという試みである。博物学者/民俗学者として活躍した熊楠は、ハイドパークなどでの菌類や藻類の収集、キューガーデンなどでの科学家たちとの交流、『ネイチャー』や『ノーツ・アンド・クエリーズ』への論文発表、ブリティッシュ・ミュージアムでの中国・日本コレクションの整理などに携わった。また一方で、神秘主義への関心も維持し、その一端は密教的な南方曼荼羅にもかみ見える。熊楠の生誕150周年にあたる今年、彼がかかわった科学知の展開を再考しながら、ヴィクトリア朝の一面をとらえてみたい。SF小説やユートピア小説といったジャンル生成の原点の一つもそこにある。

【ラウンドテーブル】

ヴィクトリア朝後期の少女雑誌—*Girl's Own Paper* をめぐって

司会・提題者：日本女子大学 川端 有子

早稲田大学 牟田 有紀子

『ガールズ・オウン・ペーパー』（*Girl's Own Paper*）は、イギリスの19世紀末、宗教叢書協会から発行され、1956年まで多少形を変えながらも続いた、人気の少女向け定期刊行物である。とりわけ女性の社会とのかかわりが大きく変動したヴィクトリア朝後期から次世紀にかけて、「少女」というタームの定義自体が大きく揺らぐなか、この少女雑誌が果たした役割は、創刊者側の意図としてはもちろんのこと、雑誌というメディアが可能にする読者側の受容の反映としても、無視できるものではない。その中からは、当時の若い女性たち、とりわけロウアーミドルの読者の姿がさまざまに浮かび上がる。このラウンドテーブルではとりわけ女子の教育・健康に焦点を当てて、交錯する言説を読み解いてみたい。

【特別講演】

ヴィクトリア朝のウォーキング―登山、散策、文学

司会：西南学院大学 金子 幸男
甲南大学 中 島 俊 郎

『18世紀イギリス思想史』を書き、雑誌『コーンヒル・マガジン』編集長、『英国伝記辞典』の編纂主幹をつとめたレズリー・スティーヴンは「足」で考え、思索する人であった。

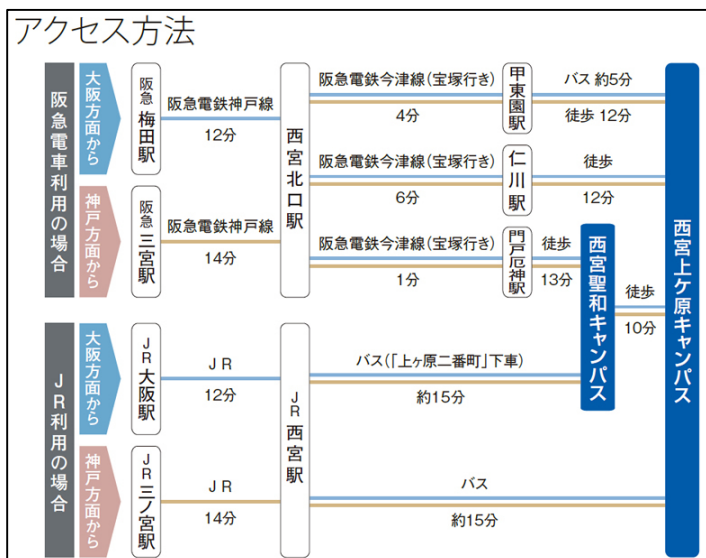
アルパイン・クラブを主導し英国登山運動の黄金期に寄与したスティーヴンにとって、「歩く」ことがもっとも文化的な意義をおびたのはロンドン郊外を逍遥する徒歩会「サンデー・トランプス」の活動においてであった。ダーウィン、メレディスなど多彩な知識人が多く参加したこの徒歩会は何を実践し、かつ発信し、どのような文化現象と結びつき、いかに展開していったのであろうか。

つとに1822年、グラスゴーで公益権として「私有地の通行権」(rights of way)を主張する運動がおこり、1824年6月にはヨークでフットパス保存協会が英国で初めて組織され、歩行という運動が社会的、政治的な意味を急速におびていた。そしてスティーヴンは、1866年、J. S. ミルなどが立ち上げた環境団体コモンズ保存協会の幹事でもあった。

「歩く」という人間の根源的な営為から派生した多様な現象がヴィクトリア朝においてどのような文化的意義を胚胎させていたのか、といった問題を過去・未来に往還させつつ、改めて検討してみたい。

*会員以外の方の参加も歓迎いたします（無料、ただし、懇親会に参加される方は懇親会費をお支払い願います）。

会場案内



阪急甲東園駅より阪急バス（1，2番乗り場）で「関西学院前」下車（約5分）

大学案内図



会場

日本ヴィクトリア朝文化研究学会
 (The Victorian Studies Society of Japan)
 事務局：東京都文京区目白台 2-8-1
 日本女子大学文学部英文学科
 佐藤和哉研究室内
 Tel: 03-5981-3560/Fax: 03-5981-3549
 E-mail: victorianstudies.japan@gmail.com